

【個人研究】

オランダにおけるイスラム問題

太田 和 敬*

Problems of Islam in the Netherlands

Kazuyuki OTA

The Netherlands was regarded as a country that had succeeded in accepting immigrants because of the Dutch attitude of tolerance, while other European countries were suffering from the problem of minorities. However, in the 21st century, some political assassinations caused a conflict between the immigrants and the native Dutch. The National Security Service and the Ministry of Education investigated the political actions and influences of Islam on Dutch society and schools and published reports in 2002. According to these reports, there exist a few trivial problems, for example, remittances from foreign Islamic organizations to the domestic ones for the construction of mosques and Islamic schools and religious education in the Arabic language. These practices instigated a negative feeling toward Islam. There are two difficulties to resolve immigration questions, restraints of marriage of Islam and confrontation about human rights including problems of abortion and divorce. The Dutch Government has made efforts to integrate newcomers but is considered to have failed because of the high unemployment and crime rates and the low average literacy level of the immigrants. Dutch society requires the restoration of tolerance. This could imply the revival of new polarization although this was denied by the Dutch Government.

Key words: Dutch society, Immigration, Integration, Freedom of Education, Polarization

オランダ、移民、統合、教育の自由、柱社会

1 オランダにおける「イスラム問題」の深刻化

ヨーロッパは多くの国がイスラム教徒との関係をどのようにつけるかという問題を抱えている。イスラム教徒の活動家に対してもかなりの自由を保障してきたイギリスにおいて、イギリスで生まれ育ったイスラム教徒が、2005年夏にテロを起こしていたことでもわか

るように、単なる移民の統合の問題ではない。歴史的に形成されてきたヨーロッパ社会がキリスト教を統合原理としてきたのに対して、イスラム教というまったく異質、しかもキリスト教と長年争ってきた宗教をもつ人々が大量に住むようになったことによる社会的・文化的・政治経済的統合・関係の問題である。

オランダもその例にもれない。少なくとも20世紀の間は、オランダ社会は「寛容」の精神から最もうまくイスラム教徒だけではなくユダヤ人を社会の中で安定的に取り込んでき

* おおた かずゆき 文教大学人間科学部臨床心理学科

たと評価されてきた。1990年代の初期まで、となりのドイツではトルコ人に対する暴行事件が多発しており、オランダではそうしたドイツのネオナチの動向に強い批判があった。¹⁾そして、1998年に出版された『デュルケムと現代教育』と題する書物の中で、オランダの研究者であるヨングは楽観的に次のように書くことができた。

民族中心主義や右派急進主義の高揚を招きかねない。彼らは移民やマイノリティを、特に失業率の増加や犯罪の増加などの社会悪の根源として激しく攻撃するだろう。(略)幸いなことに、今のところ政治的にはそれほど成功していないし、一人か二人の信奉者しか国会議員になっていない。²⁾

しかし、90年代は白人のオランダ人のイスラム教の移民に対する不満が静かに蓄積していった時期でもあったのである。³⁾As Siddieqという学校で、1997年の生徒の誰かが、学習障害がある生徒への教育的な配慮に欠けることがあると行政当局に訴えて、査察が入った。⁴⁾そして、当局は連絡をより緊密にとることと、教育的空気を改善するように勧告を行っている。El Inkade in Edeという学校では、96年に、教師が髭を生やすことやマフラーを着用するというようなイスラム的な行動を強制されるということで、オランダ人の教師が7人一切に辞職する事態となり、新聞の一面を飾った。そして、そのとき国民党(VVD)が注意を国会で喚起した。⁵⁾

1990年代はイスラム学校においても、公費で運営されるイスラム学校がどのような教育様式を確立したらよいのか模索中であつたと考えられる。

1998年に議会からイスラム問題についての覚書が出され、それを受けて国家安全局がまず政治的状况についての報告を2000年に行い、次にイスラム学校等の教育問題についての検討が始まった。その最中に911のテロが起きた。そしてイスラム学校への批判もまた

高まった。その代表的な事例が、再びAs Siddieqへの非難である。反ユダヤ、反キリスト教の文書が、職員室にあったとして、反ユダヤ、反キリスト教、反西欧的な教育を行っているという非難が巻き起こったのである。

「ラジオ、テレビ、新聞はユダヤの支配下であり、ユダヤ人は兵器産業を所有し、また他方戦争を行っている。ユダヤ教徒、キリスト教徒、そして共産主義者はみな、ひとつの線でつながっており、イスラム社会を否定している」というような文書であるとする。

もちろん、学校側はそうした教育を行っているわけではないと否定した。⁶⁾

詳細に報道を読めば、単に一部そうした文書が教師の参考文献としてあったというに過ぎず、それに基づいた教育が行われていたわけではなかった。しかし、イスラム学校では、反ユダヤ教、反キリスト教的な教育が行われているという噂として受け入れていったと思われる。

911テロはそれまで静かに潜伏していたオランダ人たちの移民への反感を顕現させることになった。アメリカのテロを喜ぶイスラム系の移民が夜騒いでいたとして、オランダ人たちの攻撃を受け、その後イスラム教徒への暴力、モスクやイスラム学校への放火があいついだ。移民からの反撃などもあり、オランダにおける「寛容」は次第に変化してきたのである。⁷⁾そしてそうした動向の少し前から、実は移民への攻撃は政治的にも始まっていた。

2002年には総選挙が行われることになっていた。政府は労働党と国民党の連立であったが、「首相は引退する」と予言して、移民制限派のフォルタインが立候補を表明したのが、2001年の夏のことである。911テロの後活発に政治活動を行い、それまで労働党の地方議会の議員だったが、2003年の3月に新党を結成し、ロッテルダムの市議会選挙で圧勝、更に6月の総選挙に向けての活動を活発に行っていた。テレビ討論で各党の党首を圧倒し、人気が鰻登りになった。しかし、選挙の直前に暗殺されてしまったのである。第一党にな

ったキリスト教民主同盟は2位のフォルタイン党と国民党と連立を組み、内閣を組織したが、最初から混乱、10月には議会の解散、1月に再度の総選挙となった。その過程でイスラム教国のソマリアから内乱時に逃れ、カナダとオランダで学んだ女性のヒルシ・アリが、脅迫されたとして地下に潜ったのが、6月の総選挙の直後である。当時アリは労働党の研究者をしており、イスラム教は問題であるとさかんにメディアを通じて述べていた。地下活動から公開の場に戻った彼女は、VVDからの選挙出馬を発表し、世間を驚かせたが、しかし、保守的な政党に移った後も、イスラム批判を続けた。

その後、さまざまな社会勢力への辛辣な批評をし、短編映画「服従」の監督と脚本を担当し、イスラムの女性差別を厳しく糾弾していた映画監督のゴッホ（有名な画家ゴッホの親族）が2004年11月2日に殺害されるという事件が起きた。犯人はオランダ生まれのイスラム教徒であり、裁判では「神の意思で殺害した」と述べた。映画の脚本作者でもあったアリは再び地下に潜るという事態になり、国会議員であるにもかかわらず、国会に出席できない状態がしばらく続いたのである。⁸⁾

2 何が問題か

1で述べたように、オランダ社会はこれまで他の国が拒絶的な扱いをしてきた人々をうまく取り込んできたと言われていた。それにはいくつかの理由がある。

第一はオランダ独特のシステムである「柱社会（Verzuiling）」である。

柱社会は、オランダとベルギー、オーストリアの一部にしか存在しなかったと言われ、オランダが最も典型的であるとされてきた。もっとも現在では相当崩れており、学校や放送で残っているだけと言われている。

柱社会とは、生活の多くの領域が宗教的な組織によって担われる状況のことである。極端に言えば、カトリックの病院で生まれ、カ

トリックの学校に通い、カトリックの放送を聞いて、カトリックの新聞を読み、職場のカトリック色の強い職場でカトリック系の労働組合に入る、そして、カトリック教会を中心として地域活動を行う。このように生活のほとんどをカトリックの世界で過ごすことができる。こうして、カトリックやプロテスタントが、同じ国にありながら、分離した生活を営む状態ができあがっていたのである。

柱社会が強くなったのは、1917年に学校闘争の妥協が成立し、宗教的な学校が完全に公立学校と同等の資格を獲得し、学校を公立や私立を自由に選択できるようになって、分離が進んでいったのだとされる。そして、1960年代から70年代にかけての産業構造や政治的变化を受けて、徐々に崩壊してきた。

オランダ人が最も誇るオランダ人の特性は「寛容」ということだが、寛容の実体を形成していたのが、この柱社会である。もちろん、オランダ人の寛容の最も歴史的に重要な側面は、宗教の自由を求めてスペインと戦い、困難な独立戦争の結果、独立を勝ち取ったという歴史的背景であろう。

カトリックとプロテスタントのように、同じキリスト教の棲み分けならば、それで済んでいた。そうした寛容は今でも生きているように感じられる。しかし、キリスト教的な柱社会が崩壊しつつあるなかで、イスラムという新たな「柱社会」が形成されつつある。⁹⁾これが、オランダ人たちには受け入れがたいものとして写っている。

第二はオランダの「教育の自由」が、イスラム教徒にも適応され、イスラム学校がキリスト教学校などとまったく平等な財政的な補助を受けて設立されていることである。¹⁰⁾そのためイスラム教徒にとっての安定した「居場所」を確保することができる。放送も同様のシステムをとっており、イスラムの主張を社会に公表することができる。

しかし、オランダ人が寛容と理解している教育の自由は、逆に民族的な差別であるという指摘もなされている。国連の人権関係の報

告で、問題視されており、その改善が要求されていたのである。ここでは、黒い学校と白い学校の分離の問題と、マイノリティの高等教育進学率が2%と極端に低いことが指摘されていた。¹¹⁾

しかし、オランダ政府の提出したレポートには、この問題は否定的な現象としては書かれていない。移民政策や就職に関して差別があることを指摘したあと、教育に関して、やはり憲法23条における教育の自由の規定が事実上、民族的な差別のように現れていることを否定はしない。白人の人たちは「白い学校」に逃避し、移民たちは生活の便宜等で集中して居住していることもあり、「黒い学校」に集中するというわけである。しかし、積極的に民族的な混合をもたらすような政策をとるべきであるか、という点に関しては、アメリカの失敗の事例から勸めていないし、また、国民のほとんどがこの23条の規定の改変を望んでいないことを認めているとして、現状として全体的には問題がないと指摘しているのである。¹²⁾

国連の認識では2004年においても、事態が改善されていないことについて、不満が述べられている。¹³⁾

さてオランダ政府やオランダ社会がイスラム移民およびその子弟を社会の中で安定的に受け入れようと努力してきたにもかかわらず、それは十分に成功していないという認識がもたれている。移民の子弟は学力が低く、失業率が高く、そして、警察沙汰になる事例も多い。これは受け入れがうまくいっていない例証となる。就業率では、オランダ人全体で69%であるが、スリナム出身66%、アンティリアン62%、トルコ47%、マロッコ44%で特にトルコ系、マロッコ系の失業率が高い。また地域でオランダ人との人間関係を全くもっていない人たちの割合は、トルコ35%、マロッコ48%、スリナム19%、アンティリアン16%となっており、失業率と相関があることが示唆される。

ライデン大学教授のエルデリングは、移民

の新しい社会での存在形態に4つがあるという説を紹介している。同化・統合・分離・周辺化である。同化はそれが実現すれば、もっとも社会問題化を回避できる形であるが、イスラム教徒の場合には、キリスト教国での同化は難しい。政治的に押し進めれば差別につながりかねない。同化とは、ネイティブの文化を放棄し、移住先の文化を完全に受容することである。同化の主なプロセスは結婚による文化融合であるが、イスラム教徒の女子は他の宗教の男性との結婚は認められない。また、イスラム教徒の男性が他の宗教の女性と結婚する場合には、女性がイスラム教に改宗する必要がある。また、イスラム教徒は先進国の人権が必ずしも優れていると考えておらず、むしろ人間的な墮落であると評価している面もある。従って、ヨーロッパで生活しているイスラム教徒はヨーロッパになかなか同化しないのである。植民地帝国であった先進国は、移民してきた人々は同化するものと考えていたが、次第にそれは困難であると理解されてきた。エルデリングによれば、オランダ政府は統合をめざしている。¹⁴⁾ 統合とは、母国の文化を保持しながら、オランダ文化を受け入れて生きていくスタイルである。しかし、統合政策にも無理があるという。なぜならば、バイリンガリズムで母語を保持し、また母国の文化を保存しようとしても、実際には一時の便宜的な措置であり、オランダ社会が全体としてそうした言語や文化を受け入れているわけではなく、将来を切り開くものにしてしようとしているわけではないからである。¹⁵⁾ 分離・周辺化はマイノリティとして社会的に差別される状況と結びつく。

問題状況はこれだけにとどまらない。統合の困難といっても、基本的に移民一世だけの問題で、二世からはオランダ社会で生まれ育っていくから、不利ではあってもオランダ社会に統合されていくと考えられていたが、前述のように、移民子弟の不利な状況が再生産され、しかも、イギリスロンドンのテロと同様、ゴッホを暗殺したのが、オランダで育ち、

オランダでイスラム教徒となった新世代だったことが、統合問題の複雑な問題を提起しているのである。

3 国家安全局の調査

国家安全局は、1988年6月にイスラムの政治的状况についての報告を行っていた。そこでの概略は、オランダには穏健なものから過激なものまで多様なイスラム教徒やその団体があり、大方ヨーロッパ的な価値観には否定的で統合への抵抗感があるが、しかし、イスラム国家樹立のようなラディカルなものは少ない。モスクが政治的な意味合いをもっており、リビア、サウジアラビア、イランなどの影響を受けている。革命を目指すようなラディカルな小さなものは、支持者を獲得するような活動を行っているが、当面は大きな危機をもたらすようなものとは思われないというものであった。¹⁶⁾

国家安全局はさまざまなイスラムへの否定的な感情を踏まえて、政治的な状況の次に教育を中心とする動向の調査を行った。報告書は2002年2月に出された。その内容を見ておこう。

この調査は課題を以下のように設定した。

- 1 どのくらい外国のイスラム勢力や国家の影響がオランダのイスラム教育に影響しているか。
- 2 どのくらいイスラム過激派が活動し、子どもの教育に影響を与えているか。
- 3 どのくらいオランダ社会の統合に反するような干渉が行われているか。
- 4 どのくらい民主的な原則に反するような干渉が行われているか。¹⁷⁾

1988年最初のイスラム学校が2つでき、それから4年後には26校になっていた。多くの自治体は、設立については消極的である。2001年には32校、6000人の生徒がいる。まだ全体としてみれば、微々たるものである。

イスラム学校の30%はトルコ系である。トルコは世俗国家を志向しており、国家政策と

して、オランダにイスラム学校はもはや必要ないという認識をもっている。トルコ系のイスラム学校の運営者も非トルコ系の者が増加しており、更にイスラム学校におけるトルコ系の子弟の割合も低下している。¹⁸⁾

20%は雑多な出身者の学校であり、どちらかというスリナム系が多い。学校の設立においては、Stichting Islamitische Onderwijs Nederland (ION) に属している。

40%はマロカーン系で、宗教教育を重視し、外国の資金の援助を受けており、極めて保守的である。外国の団体は過激なものもあり、過激な Egiptische Moslimbroederschap に近い。ここには、ソマリア、スーダン、アフガンなど新しいマイノリティも多い。

ひとつ、スリナム・ヒンドゥイスラム学校 World Islamic Mission Nederland (WIMN) がある。¹⁹⁾

オランダでは私立学校を設立する場合には、ドームと言われる学校の協議会に入る必要があるが、イスラム学校のドームである ISBO は非常に活発に活動し、イスラム学校の運営だけではなく、新しい学校の設立に熱心である。²⁰⁾ またイスラム学校で問題が起きたり、社会的な批判を受けたりすると、対応もしている。

小学校に比べて中等学校は設立が遅れ、まだ数が少ない。2000年にロッテルダムに最初の中等学校のイスラム学校ができた。これは北アフリカ出身者が努力したもので、宗教的には保守的である。更にアムステルダムに2校2001年に ISBO がイニシアをとって設立された。しかしこれらは、大学に接続する VWO ではなく、以前の MAVO に相当する学校である。

高等教育はまだまだの段階だが、HBO はある。Aan de Educatieve Faculteit Amsterdam en de Bijzonder Leerstel で Stichting Islamitische Hoger Onderwijs SIHO がイニシアをとっており、アムステルダムと提携している。

De Islamitische Universiteit Rotterdam は認可された大学ではないが、多くの学生を集めて

いる。またDe Islamitische Universiteit van Europa.ができた。²¹⁾これらは政府によって認可された大学ではないので、公費補助は受けおらず、財政的には苦しい。

イスラム学校の状況はこのようなものであるが、では問題となるそれぞれの点についてはどうだろうか。

外国からの干渉については、3つの団体を問題視している。リビアのWorld Islamic Call Society、サウジアラビアのAl-Waqf al-islam、そしてトルコのTurkse Diyanetである。

最も問題視しているのはAl-Waqf al-islamである。

Al Waqf は中等学校や高等教育機関にはないが、小学校に多くの援助資金をしており、イスラム小学校の20%に及ぶ。88年からオランダに事務所を開設して、活発な資金援助をしている。

報告書は、あまり過大評価すべきではなく、内部分裂があり、また、オランダの公立学校は、公費で運営されており、財政的に依存しているわけではないし、オランダにはサウジからの移民はほとんどいないとしている。²²⁾

興味深いことは移民のイスラム教徒よりは、オランダ生まれのイスラム教徒の方が熱心なことである。彼らの方が非寛容、差別、反民主主義、反統合的性質をもっている場合がある。²³⁾

Al-Waqf が注意されるのは、オランダでの影響力を拡大しようとしていることと、何よりもサウジアラビアがイスラム原理主義のひとつの拠点であり、911テロを起こしたテロリストが多くサウジアラビアに関連した人物だったという点にある。

amaaiyya al-Dawa (WICS) はリビアの情報機関で、世界中に100もの事務所があり、リビア政府の宗教的・政治的政策を広めるための活動をしており、オランダではAl Dawa モスク(コトレヒト)を設立するなど、モスク建設に多くの資金を投入し、また、小学校に多くの資金援助をしている。しかし、直接の教育への影響力を行使しているわけではない。

イスラム団体への行使が中心であると分析している。1999年のHadi Nowesri が国外追放になった後、活動は低下した。²⁴⁾

イスラム学校の大部分の教師は「統合」的な視点から出発しているが、そうでない部分もある。少ないけれども、本国へのアイデンティティをもっている者がいる。²⁵⁾

援助資金はだいたい清掃、マシン、運転手などに使用されているということで、報告書は使用法から特に問題視していない。

Diyanetはトルコのイスラム教の団体であるが、1960年代にトルコ人がオランダにやってきて、オランダの中で文化的なアイデンティティを確立していない時期にオランダ支部が設立され、モスクなどの建設をリードし、オランダにおけるトルコ人たちの文化的啓蒙を担ってきた。教育活動としては主にコーランの教化・教育を行っている。²⁶⁾

オランダで3つの小学校に影響力をもっていたが、ひとつは廃校になり、他のふたつは非トルコ人の校長になっている。Islamitische Stichting Nederland voor Onderwijs en Opvoeding ISNOは、教育の専門家がいないので、小学校への影響力は低下しており、トルコはむしろトルコ人的なアイデンティティからイスラム教徒へのアイデンティティ移行を恐れている。²⁷⁾

では、過激派の干渉についてはどうか。

トルコのMilli Gorus beweging MGはヨーロッパで最大のイスラム組織とされ、オランダで30000人を組織している。オランダ社会の中ではイスラム教徒の統合や解放をめざしており、ゴッホ殺害のテロを批判しているが、モスクの中では過激な言動もあるとされている。²⁸⁾ Nederlandse Islamitisch Federatie NIFとMilli Gorus Noord-Nederlandのふたつの組織に分かれており、ともにヨーロッパ組織のAMGTとつながっている。6つの小学校をそのイニシアで設立した。翻訳が中心で、問題となることはほとんどやっていない。²⁹⁾

オランダのトルコ人社会には10の寄宿学校がある。そのひとつは、Turks Islamitische Federatiによって指導されている。ある生徒の

インタビューによると、一人の先生が教えていて、オランダの価値は軽視し、トルコ的な価値を重視したものであったという。

ハーグには、World Islamic Mission Nederlandの作る中等職業学校があり、主にスリナムとヒンズーの出身者が100人学んでいる。³⁰⁾

問題はあるものの、大きな問題ではないというのが、トーンの報告書であるが、いくつかの点については、厳しい見解を述べている。まずPolarisationの危険があるという。従って、柱社会の再構築は政府の政策ではないことを示している。次にハマスのビデオに見られるような外部勢力のイスラム学校への干渉は教育として好ましくない。オランダは国家としての宗教をもっておらず、自由を保証しているのに、エジプトのJihadやアルジェリアのgroupe Salafiste pour la Predication et le combatなどの影響も可能だ。そうした人が学校の運営に携わったら好ましくない影響がある。また内部からの反統合、的な操作も可能である。³¹⁾

OALTは好ましくない状況があるとする。報告書によれば、彼らは誤解している。OALTは1998年から導入されたが、統合に反し、非寛容な感じで使用されている事例もあるという。³²⁾OALTはあくまでも下級段階での言語教育を目的としているが、それを宗教教育でやっている。これが大いに問題である。

結論として大部分は問題なく、民族的、宗教的アイデンティティは違法ではない。しかし、外国からの援助は教育の自由を反する、資金援助等そういう事例がいくつか見られる。³³⁾

さてこの報告書はメディア的には大きな話題を呼んだ。

大衆紙Telegraafは早速、次のような記事を載せた。

まず、文部省の次官アーデルムント(PvdA)に、イスラム学校では反ユダヤ的、差別的な教育が行われており、このような学校には子どもを来させたくない、と語らせ、サウジアラビアの団体から年間300000ドルの資金を提供されており、ISBOの代表のMohamed

Douiyebは、麻薬中毒の殺人に関与している疑いで逮捕されたことがあるなどと報じている。³⁴⁾

新聞の見出しを見ておこう。

「イスラム学校 憎悪の泉」Telegraaf 2002, 2, 18

「イスラム学校 批判を拒絶」Telegraaf 2002, 2, 28

「イスラム学校を厳しく批判」NRC 2002, 2, 19

「イスラム学校はもっとオープンに」Algemeen Dagblad 2002. 2. 20

「奇妙な」Telegraaf 2002, 2, 20

これに対して、文部省に対してイスラム学校の特別査察を行うようにVVDが要求したことを紹介している。

4 文部省によるイスラム学校調査報告

文部省からもふたつの重要な文書が出された。ひとつは、憲法23条についての検討であり³⁵⁾、他のひとつはイスラム学校の視察報告である。オランダに公費で運営されるイスラム学校が存在するのは憲法が「教育の自由」と「公立学校と私立学校の財政的平等」を規定しているからであり、1960年代以降柱社会を否定する勢力が現れ、また、柱社会が徐々に弱体化していったことから、憲法条項が問題になっていただけではなく、特に1990年代にイスラム学校設立が増大したことから、問題視されることが多くなってきたために、憲法23条の検討を行ったものである。この報告の結論は、イスラム学校が社会的統合にマイナスになってはならず、教育の自由は維持されるべきであるというものであった。³⁶⁾

イスラム学校の調査は、国家安全局によるイスラム学校の調査を意識していると考えられるが、直接には1998年に制度化された3年に1度の視察をイスラム学校に対して集中的に行ったものであろう。イスラム学校がオランダの統合にとって、大きな政治問題になっていなくても当然制度的に行われるべき調査

であるが、911以後の社会的状況を反映して、注目され、しかも、2002年10月という公表の時期が移民によるオランダ人青年への暴行殺人事件と重なったために、大きな社会的な話題になった。

イスラム学校の教育が、社会の統合という観点から問題となったのは、1990年代の後半である。その結果の要点は以下の通りである。

- 1 行政当局との関係に問題がある学校がある。
- 2 親の参加について問題がある学校がある。
- 3 宗教教授について問題がある学校がある。
- 4 全般的に教育の質が低い学校がある。

これらの学校はそれぞれがひとつの学校とされ、大きな問題とされたわけではなく、決論的には社会的な統合について問題があるとはいえないとされている。³⁷⁾ 学力水準も平均的であるされた。しかし、いくつかの学校が問題ありとされたことがメディアによって大きく取り上げられ、文部大臣もイスラム学校は問題があるという発言をしたためにイスラム学校の廃止を主張する政治家も現れたほどである。

とくに問題とされたのは、3番目の問題である。ただしそれは単なる宗教問題ではない。イスラム教徒の子どもがオランダの学校や社会に適應する際に最も問題となるのは、言葉の問題であり、家庭言語と学校・社会言語が異なるために、オランダ語の修得が不十分になり、そのために学校での成績が悪く、不適應を起こす場合が少なくない。そのためにオランダではOALTと呼ばれるバイリンガリズムに基づく言語教育がなされており、ひとつの学校を除いてうまく機能していると評価されている。³⁸⁾ しかし、イスラム学校ではそれとは別の言葉の問題がある。イスラム教においては、宗教的な教授はコーランが書かれているアラビア語でなされる。これがイスラム教徒の相互の共同意識を形成している最大の手段である。アラビア語を使用していないイ

スラム国家も多数あるが、コーランを学ぶことでアラビア語をある程度修得することになる。

オランダの学校では教育言語はオランダ語と法で決められており、母語の教育を同時に行うが、それは宗教的な教育とは異なる。従って宗教教育をアラビア語で行うことは、オランダの法律に違反するという批判が生じることになる。そして、イスラム教は先述したように、現在の先進国の人権意識と異なる倫理を保持している。イスラムにおいては政治と宗教は一体であるから、宗教的な教えは直ちに政治的・生活的な指針となる。そのなかには欧米的な人権概念と衝突する場面があり、イスラム学校では宗教教育を通して、あるいは学校全体の秩序の中で反人権的な教育が行われているという認識につながるのである。すなわち人権と言語による社会的統合上のマイナスという点で、報告書はイスラム学校の問題点を指摘している。³⁹⁾ そして、1996年に起きたBilal te Amersfort学校でのハマスのビデオを授業で見せたという事件や、⁴⁰⁾ 1で紹介したような事例が反イスラム学校のキャンペーンとして利用された。

宗教の自由を原則的に認める限り宗教が求めている言語を禁止することはできない。社会的な問題を感じていなければ、宗教言語としてオランダ語以外が使われていても特に問題にはならないのであろうが、オランダ社会への統合にマイナスであるという認識が示された。⁴¹⁾

もちろん、そういうイスラム学校でも、通常の授業をアラビア語で行っているわけではない。あくまでも宗教教授の授業だけである。そういう意味では宗教教育の自由の原則に違反しているわけではないのである。

イスラム学校側も相当過敏に反応した。

ISBOの事務局のM. Akbulutが、運営の失敗を認め、指摘された学校については、きちんとするように変えていくことを約束したと紹介している。⁴²⁾ 議長のDouiyebは、イスラム学校が外国から資金を得て、社会的統合に反

する教育をやっているなどとは奇妙な言いばかりだと反論した。

しかし政治的状況は確実に移民に対する規制的な方向に向かった。

VVDの2003年の選挙綱領は、移民政策として、移民の制限、既に移民している人たちについては、オランダ語修得と憲法に規定されたオランダ的価値観と規範の受容を求め、不法移民や難民については厳しく取り締まることを公約している。

また、学校についても、さぼり行為について、学校に復帰させることをめざすとしている。

2003年が明けて、イスラム学校への指導があった。いわばオランダ版「スカーフ事件」である。het Landelijk Bureau ter bestrijding van Rassendiscriminatie (LBR) という団体が、イスラム学校におけるスカーフの強制をやめるように指導したのである。⁴³⁾そして、アムステルダムのプロテスタント系の中学校でイスラム教徒の女子生徒がスカーフをつけて通学したところ、退学になる事件が2003年に起こっている。

5 共存のあり方は

さてこのように、寛容だとされたオランダにおいても、イスラムの移民とオランダ人の間に次第に不寛容の状況が形成されつつある。不幸な殺人事件も複数起きた。そういう状況の中で政府関係によるイスラム移民の状況に関するかなり包括的な調査が行われ、結論的には問題は少なく、ごく例外的な事例として不十分な面があると指摘されながら、メディアを含めてイスラムへの非難が巻き起こるといった光景が生じてしまった。

この報告に感じるトーンは、とにかくイスラムへのいらだちということであろう。

大部分のイスラム教徒がテロリストでないことは、合理的なオランダ人はよく理解している。オランダの学校は私立学校も公立学校と平等な財政的な補助があるが、それはイス

ラム学校に対しても同様であり、それだけではなく、移民の子弟に対しては、公費を支出する積算基準が多く計算される。また、CITOという全国の学力テストで低学力であった学校には特別の補助が出されて、学力の底上げが求められる。つまり、移民の子弟に対しては、一人当たりの公費支出が多いと考えられる。また、移民やその子弟は失業力が高いから、生活保護を受ける割合も高く、中にはオランダ語を修得しようとせず、ずっと生活保護に頼っている人も存在する。そのようにオランダ人の税金で移民の生活と教育を支えていることに対する苛立ちが募ってきたことが、基本的な背景となっているのである。

オランダでは教育的価値として、通常のオランダ社会の価値観や規範を重視する。もっともそれは狭い意味でのオランダ的なものではなく、基本的にはオランダ憲法に規定されている人権概念が中心となる。しかし、現代ヨーロッパの人権概念とイスラム社会の価値観は必ずしも一致しておらず、イスラム側から見るとヨーロッパの人権概念が反道徳的に思われるものがある。離婚、中絶、同性愛など、少し前まではカトリック教会が公的に否定していた概念である。イスラム教徒にとって、こうしたことは墮落でしかない。オランダ人から見ると、ここはオランダ社会であり、かつ人権は普遍的概念であるという意識がある。しかし、宗教的な信念はどこにあっても同じであるという意識から見ると、オランダ社会にやってきたからといって、「正しい」ことが変わるものではないとイスラム教徒は感じているだろう。

このようにヨーロッパ先進国の論理とイスラムとでは、宗教的な拘束の相違と人権概念(それは政治と宗教の関係と不可分である)の相違という、ふたつの点で統合が困難である。オランダ社会は前者に関しては実質的に柱社会の部分的復活という棲み分けが妥協点として進展しているように感じられる。そして、これは国際的な規模での棲み分けの一時的な方法として考察の価値があるといえる。

しかし、人権概念の違いについてはどうだろうか。カトリックやアメリカのキリスト教原理主義とイスラムでは多くの中絶や離婚へのネガティブな立場や家族の価値を重視するなど、共通点がある。従って、これはキリスト教とイスラムの対立というよりは、基本的には人権概念の検討課題なのだと考えられる。

註

- 1) 1992年11月22日、北ドイツのメルンというところで、ネオナチグループがトルコ系住民の女性と子ども2人の計3人を殺害した。こうした殺害は実はこの年だけで、15人に及んでおり、内務省当局の発表によると、1800件の暴力行為があった。ドイツの新聞は「ドイツにおける外国人の生命が、今危険に晒されている。国家は外国人に対する暴力的な行為から守る義務がある。」と反省的な文章を掲載していた。Von Cornelia Schmälz-Jacobsen 'Leib und Leben' "Die Zeit" 1992.11.27 それに対してオランダの新聞は、やはり戦前のドイツを思い起こさせる論調である。「右翼過激派のトルコ人殺害は、当然ワイマールを思い出させている。」Annet Bleich 'Echo's van Weimar' "de Volkskrant" 1992.11.27 イギリスでは、既に移民を制限すべきであるという論調が強くなっていった。'EC set to fence out refugees' "Independent" 1992.12.2 なおこの間の新聞の論調の紹介については、太田 <http://www.asahinet.or.jp/~fl5k-oot/du-tu05.htm>
- 2) マルトーヤン・デ・ヨング、ジック・プラステル『多元化社会における社会統合のための教育』ジェエフリー・ウォルフォード編『デュルクムと現代教育』黒崎勲・清田夏代訳同時代社2003 p168
- 3) この論文で「オランダ人」と書くときは、移民やその子弟と区別するために、白人のオランダ人を指す。もちろん移民やその子弟も国籍はオランダ人であるが、考察する問題を考慮して、このように記す。
- 4) NRC Handelsblad 1998.12.5 (以下 nrc と略)
- 5) nrc1998.12.5
- 6) Antisemitische en -westerse teksten imam-schoolleider 14 oktober 2001 同じような趣旨の報道 Het Parool 15 oktober 2001
- 7) European Monitoring Center on Racism and Xenophobia "Anti-Islamic Reactions in EU after the terrorist acts against the USA-The Netherlands" 2001.12には、オランダ国内でイスラム教徒への差別的言行が増加していること、そして右翼過激派の政治勢力が活発化していることが報じられる一方、市民組織がそうした差別に反対する行動を組織していることが指摘されている。
- 8) アリはその後、イスラム教を批判したのは間違いだったと謝罪し、イスラム教は、道徳的にも倫理的にも間違っていないと述べた。
http://www.planet.nl/news/0.2031.80_467_1329039_00.html ゴッホ殺害については、読売新聞「[追跡テロリスト](20)オランダ・映画監督殺害」2005.8.21 小林恭子「寛容の国はいま-イスラム教徒の移民におびえるオランダ」『世界』岩波書店 2005.10 などにも紹介されている。
- 9) デ・ヨング前掲
- 10) 次のような指摘がある。「オランダの社会構造に付随する寛容の文化は、他の宗教的集団がこのシステムに順応することを可能にしてきた。」マルトーヤン・デ・ヨング、ジック・プラステル『多元化社会における社会統合のための教育』ジェエフリー・ウォルフォード編『デュルクムと現代教育』黒崎勲・清田夏代訳同時代社2003 p169
- 11) COMMITTEE ON THE ELIMINATION OF RACIAL DISCRIMINATION "Concluding observations of the Committee on the Elimination of Racial Discrimination : Netherlands." 30/03/98.
[http://www.unhchr.ch/tbs/doc.nsf/\(Symbol\)/CERD.C.304.Add.46.En?Opendocument](http://www.unhchr.ch/tbs/doc.nsf/(Symbol)/CERD.C.304.Add.46.En?Opendocument)
- 12) h International Convention the elimination of all forms of racial discrimination ④ Fourteenth periodic reports of States parties due in 1999 : Netherlands. 06/07/99. CERD/C/362/Add.4.(State Party Report) [http://193.194.138.190/tbs/doc.nsf/\(Symbol\)/CERD.C.362.Add.4.En?Opendocument](http://193.194.138.190/tbs/doc.nsf/(Symbol)/CERD.C.362.Add.4.En?Opendocument)
- 13) 12. The Committee regrets that no reference is made in the report to article 3 of the Convention in relation to racial segregation and continues to express concern at the situation of de facto school segregation in some parts of the country.
<http://sim.law.uu.nl/SIM/CaseLaw/uncom.nsf/0/8703372a8881f3cac1256e6e003109b9?OpenDocument>
- 14) L. Eldering 'Integratie van allochtonen: een kwestie van lange termijn' p5
- 15) ibid. p6
- 16) **De politieke Islam in Nederland , 26 juni 1998 およびその解説**
<http://www.minbzk.nl/aspx/get.aspx?xdl=/views/bzk/xdl/page&SitId=10&VarId=1&ItmId=1189>
- 17) "De democratische rechtsorde en islamitisch onder-

- wijs” p6
- 18) ibid. p12
- 19) ibid. p13
- 20) ibid. p13
- 21) ibid. p14
- 22) ibid. p16
- 23) ibid. p20 オランダのテレビ番組である NOVA は32校の小学校のうち、10校が Al Waqf と関係をもっており、イスラム原理主義の影響を受けていると報道した。
http://www.novatv.nl/index.cfm?achtergrond_id=127&fuseaction=achtergronden.details
- 24) “De democratische rechtsorde en islamitisch onderwijs” p15
- 25) ibid. p21
- 26) <http://www.diyonet.nl/nl/index.php?sayfa=educatie>
- 27) “De democratische rechtsorde en islamitisch onderwijs” p17
- 28) http://nl.wikipedia.org/wiki/Milli_G%C3%B6r%C3%BCs
- 29) “De democratische rechtsorde en islamitisch onderwijs” p19 オランダ社会での統合を重視するが、モスクでは過激な祈りがなされており、トルコの過激派の Refah-partij と結びつきがあるという指摘もある。Wikipedia Nederland
- 30) “De democratische rechtsorde en islamitisch onderwijs” p10
- 31) ibid. p8
- 32) ibid. p22
- 33) ibid. p25
- 34) Telegraaf 2002.2.19
- 35) Onderwijs Raad “Vaste Grond onder de Voeter Een Verkenning inzake artikel 23 Grondwet” 2002.7
- 36) 詳しくは太田和敬「オランダにおける教育の自由の構造」(日本教育学会2005年発表)
<http://www.asahi-net.or.jp/~f15k-oot/nedelandsonderwijsrecht-5.pdf>
- 37) Een inspectierapport “Islamistische Scholen en Sociale Cohesie” Utrecht 2002.10
- 38) ibid. p13
- 39) ibid. p16-18
- 40) Binnenlandse Veiligheidsdienst “De democratische rechtsorde en islamitisch onderwijs--buitenlandse Inmenging en anti-Integratie tendensen” 2002.2 p15
以下本書を“De democratische rechtsorde en islamitisch onderwijs”と略
- 41)これと反対に、ベルギーのイスラム教徒たちは、アラビア語を公用語に加えるべきであるという主張をしている。ベルギーは現在公用語として3つ定められている。北部のフラマン語(オランダ語)と南部のフランス語、そして、共通言語のように使用されている英語である。言語を使用している人の数から見るとアラビア語を加えるのが当然であるというのが、その主張である。
- 42) APN 2002.2.21
- 43) Reformatisch Dagblad 2003.1.2